

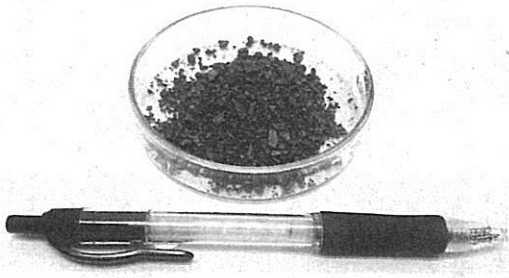
千葉大ヨウ素活用技術開発

国内製品製造へ産学官で

千葉大は、国内生産量の大半を県産が占めるヨウ素を利用し、次世代型太陽電池の原料の安定供給や、新たな医薬品を製造する技術を開発するため、研究拠点「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター」を西千葉キャンパス（千葉市稲毛区）に設ける。製造技術が国内で確立すれば雇用と輸出の拡大が期待できるといい、完成は来年3月の予定だ。

来春に研究拠点

国内で生産されたヨウ素



代型太陽電池の原料の安定供給や、新たな医薬品の製造につながる技術開発などのプロジェクトに取り組む。千葉大の理学、工学、薬学の教授ら約15人と、共同研究を行う民間企業3社の参加が決まり、追加募集を実施中。県や県内の研究機関にも協力を呼びかけ、産学官で臨みたい考えだ。

千葉大やヨウ素学会などによると、ヨウ素には様々な性質があり、X線の造影剤やうがい薬、耐熱安定剤といった幅広い分野で活用されている。近年は、ヨウ素を含む化合物が、光を効率良くエネルギーに変える性質に注目が集まっているという。

県内では、約40万〜300万年前に堆積した九十九里地域の地層（地下500

〜2000m）に含まれる「かん水」から、ヨウ素が採取されている。2015年の県内生産量は約8370tで、国内生産量の8割近く、世界の推定生産量の2割以上を占めた。

しかし、X線造影剤の製造など医療分野では海外メーカーが先行しているため、国内産のヨウ素の約4割は医薬品の原料として輸出され、製品が輸入されて

いるのが現状だ。残る約6割は、工業製品の原料などとして用いられている。

このため千葉大は、同センターの開設を決定。次世

同センターの整備を中心となって進めている荒井孝義教授（理学・化学）は「付加価値の高い製品を国内メーカーが作る技術を開発することで、輸出入の構造を変えたい」と話している。